

第5回北川村文教施設・子育て環境等整備事業基本計画検討委員会 議事録

開催日時	令和3年11月17日（水）19:00～21:00
開催場所	北川村立北川小学校 多目的ホール（オンライン併用）
出席者	■ 小笠原委員、田中委員、山崎（美）委員、山崎（和）委員、田所委員、小松委員 - 永野委員長、伊庭委員、倉斗委員及び中山委員（リモート参加） 計10名 ■ アドバイザー 柳川アドバイザー ■ GPMO 湯川 ■ 事務局 野見山副村長、西岡教育次長、百々次長補佐、溝渕主幹
議題	（1）開会 （2）前回内容の確認 （3）保小中一体化を目指す学校施設の機能と既存施設活用の可能性について （4）その他 ・電子図書について ・次回の検討委員会について
配布資料	・資料1 第4回検討委員会議事録 ・資料2 保小中一体化を目指す学校施設の機能と既存施設活用の可能性について ・資料3 電子図書について

議事経過	（1）開会 【事務局】 ・事務局挨拶
------	--

議事経過	（2）<u>前回内容の確認について（第4回検討委員会議事録【資料1】）</u> 【事務局】 ・【資料1】に基づいて説明 ・質疑は特になし
------	---

議事経過	（3）<u>保小中一体化を目指す学校施設の機能と既存施設活用の可能性について（資料2 保小中一体化を目指す学校施設の機能と既存施設活用の可能性について）</u> 【柳川 AD】 ・【資料2】に基づいて説明 【山崎美砂委員】 ・図書館など、魅力的な提案であると思う。一方で、普通教室が現在よりも狭くなるというイメージがつきにくい。特に中学生は体が大きくなる時期であり、現在はゆ
------	--

ったりと学習ができる環境だが、それが狭くなることによって少し窮屈になるのではないかという印象を持った。

- ・また、オープンスペースは小学生低学年にとっては魅力的であるが、中学生がそれと同じようなものが必要なのかは考える必要があると思う。
- ・家庭科室が現在は別々である調理室と被服室とをまとめて一緒にして、地域の方も活用できるというのはとても良いと思う。

【柳川 AD】

- ・特別教室の利用率については、私の感触として、地域がいつでも自由に使えるという状況ではない部分があると考えている。先生方が存分に「今日そうだこれを使おう」と思った時に使える状況を作っておくことが必要と考え、今の面積を現行と同じ広さに揃えている。その辺りを踏まえて使い合わせて行く環境を整えていくというのが1つ大きな課題になると考えている。

【倉斗委員】

- ・今日柳川先生が示していただいた供用の案というのは1つの考え方だと思う。同じような小規模の学校だと小中一貫になっているところがあり、こんな学校もあるという例を今手元にあるのでお見せしたい。（画面共有）
- ・目黒区小学校は現在学年2クラスの学校だが、ここはワーキングスペースという名前で理科室と家庭科室を1つの教室で作っている。小学校だけなので調理実習が大変少ないということもあり、理科と兼用で使うということは全く問題ない状況である。
- ・もう1つは吉備高原小学校で、こちらも学年1クラスの学校で、ちょうどこの部分（画面共有の図を示しながら）がワークスペースになっており、様々な活動ができる。また、ここに理科室兼家庭科室を取っていて、空いている方を使ったり、どちらかが空いてれば広げて使ったりという形で運用している。調理室はランチルームの奥にあり、ここで調理実習をしてランチルームで試食をするという使い方をしている。このような形で効率的に使用頻度を考えて作っている例もあるので、柔軟に考えていけたらいいと感じた。
- ・また、例えば音楽室みたいな音を出す部屋はオープンでなく閉めきっておく構造が必要になるし、外国語教室も音を出す部屋であり、逆に音が外から入ってきても嫌である。そういうことから、音を遮る機能をどういう部屋につけるのかも考えておく必要があると思った。
- ・今資料がないが、小学校の図工は、イメージだとアートなので一般的に美術室となるが、技術家庭の学習として技術室を兼用している例もある。これだと現在木工金工などものづくりの学習を扱う授業時数が減ってきているので、図工と技術家庭の学習を1つの教室で使用するという例もある。教室というのは教科名で付けられてしまうところがあるが、そこでは何をやる部屋なのかという観点で、改めて特別教室のあり方を考えるなかで、一緒にしておいた方がいいものが見えてくると思っている。

【柳川 AD】

- ・カリキュラムあるいは先生方がどういうことを大事に授業を行うのかによっても組み合わせは変わってくるのだろうと考えている。今は基本計画なので、いろんな可能性があるというところを考えながら進めさせていただくのも1つであり、その中で、最終的にはこの組み合わせがいいのではないかとというようなところを見つけていけるといいのではないかと考えている。
- ・吉備高原学校のワークスペースについては、自分も本当に素晴らしく、有効に活用できる場所ではないかと考えている。

【永野委員】

- ・北川村の子どもの特性がどのように反映されているのか。子どものコミュニケーションを課題と感じているのであれば、交流する場や経験をする場などがどこに、どのように反映されていくのかをお伺いしたい。
- ・また、子どもが何かしら相談する場所があったらいいではないかと思う。
- ・パソコンルームを面積の中で計算して提案いただいている。これまでであれば情報関係の部屋が必要だったが、もう通常の教室の中でパソコンを使って学習できるので、情報の部屋は必要がないと思ったがどうか。

【柳川 AD】

- ・北川村の子どもたちの特性について、大事にしたいと考えているのは図書館だと考えている。友達や先生だけではなく、村内外の大人と学習を深めたり相談したりしながら探究的な学びを展開できる空間として、従来の図書館とは違う機能を持たせた空間を考えている。
- ・子ども達の学びを考えたときに、必ずしも地域の方たちといつも触れ合っていることは適切ではないということもあり、空間構成については追って示していきたいし、メリハリを効かせた空間を整理して提案していきたい。基本計画を踏まえて、設計者のイメージが膨らむようなものを作っていけたらと考えている。
- ・先ほどのパソコンの部屋も同様に、私も現状から見てどうかと思うところもある。それも含めて検討させていただきたい。

【伊庭委員】

- ・倉斗委員が示した写真の中に、全校生徒がご飯を食べている写真があったが、今回のプロセスの中で給食をどうお考えになっているのか。全校生徒で食べると自校式のようなになるのかという点で、ランチルームと調理室がどういう感じになるのか教えていただければと思う。

【柳川 AD】

- ・現在北川は自校給食であり、今はコロナで中断しているが、基本的に小中みんな一緒に食事をしている状況である。子どもたちからもこのランチルーム的な環境を守っていききたいという声が上がっていたので、そこはこれまでと同じように作っていききたいと考えている。地域の方からも、そこに入って一緒に給食を食べるようなことができないかというようなお話も出ているので、1つの案としてまた改めてお示しをさせていただきたい。この多目的ホールを地域も含めた食堂のような形にさせていただくのもいいのではないかと考えている。
- ・現状の面積比較をすると、この多目的ホールと現行のランチルームはほぼ同じ大きさである。なおかつ、この多目的ホールの隣の技術室が調理室と同じ大きさになっている。そういう意味ではこちらに少し改良を加えると、自校給食がそのままできてしまうというようなことも可能なのではないかと考える。
- ・一方、この多目的ホールの隣にプールがあるが、そのプールの隣に道路がある。このプールは年代的にはもう解体すべき時が来ているので、解体して広場にしていって外につながっていくような場所にしていこうというようなことも可能なのではないかと考

えており、そういうことを含めると、地域交流拠点というような形でのランチルームの有り様というものが可能性として開けていくのではないかと思います。

【柳川 AD】

- ・【資料2-3】～【資料2-4】に基づいて説明。

【永野委員】

- ・学校と村民会館の合築は大賛成である。地域の中で暮らしている中で、特に調理室はよく使うと思うが、別々でなくとも学校にあれば十分足りるのではないかと思います。気持ちもある。交流と言う観点からも同じような発想で良いのではないかと思います。

【柳川 AD】

- ・現在、教育委員会の事務局が村民会館に入っているの、これをどう考えていくかということが1つ重要なポイントになる。また、その時役場をどう考えていくのかということにも関わってくる内容なのではないかと思っている。
- ・特別教室の住民利用を考える際に、日中は貸館により様々な教室をそこで行いたいという話も出ているが、学校と住民参加の調整をきちんとコーディネートできる人の常駐というものは大事になってくる。ソフトのマネジメントが大変重要になってくる中で、どういう運営体制を組んでいくのかはPPPも関連してくる内容になると考えており、この辺りを精査して行くことが今後大切になってくると考えている。

【伊庭委員】

- ・公共施設マネジメントの考え方で、アセットマネジメント（※実際の所有者に代わって管理・運用を行う業務）の観点からも良いと考えている。大人と子どもの活動時間は異なるので、多目的ルームが使えるようであるし、学校と村民会館と一緒にするのは私も良い考えだと思う。

【柳川 AD】

- ・今も北川村文化祭として村民会館で長い期間展示をしているが、そういうのも学校空間の一角で行っていくというのも1つあるのではないかな。その期間が、例えば子供たちの様子を見る授業参観の期間になるということもある。あるいはイベントや発表会みたいなものを学校の体育館を使って、子供たちが運営をサポートする側になって、例えばフランクフルトを焼いてお爺ちゃんお婆ちゃんに提供するなどの機会にも使っていける可能性が広がっていく。教育の方にも大変効果が出てくると考えている。特に、北川村の課題になっている新しいチャレンジあるいは自分で行える機会をつくっていける場面も増えていく学校になっていくのではないかなということを感じている。

【伊庭委員】

- ・以前、美術館を検討したときには、美術館は廊下でいいのではという考えもあった。そういう意味では、学校が美術館になっていって、ビエンナーレやトリエンナーレが行われていくのは非常に面白いと思う。

【柳川 AD】

- ・そういう意味では、モネの庭もあるので、アートと絡めた取り組みもできるのではないかと考えている。

【田所委員】

- ・同じような施設は不要だと思っていたが、村民会館を学校に複合化させるのは良い案だと思う。ただ、村民会館が野友地区の災害避難拠点になっているので問題ないのかは気になる場所である。

【柳川 AD】

- ・【資料2-5】に基づいて説明。

	【田所委員】 ・素晴らしい考えだと思う。 【山崎美砂委員】 ・防災については、子どもにとって重要である。学校施設の中で普段から防災のことを学べるのは大切だと考えている。 【山崎和美委員】 ・園として防災を地域の方と一緒に取り組むのは少ない。みんなで一緒にできることとなれば望ましい。 【小笠原委員】 ・阪神淡路大震災などの経験を踏まえて、こういった防災備品が増えてきているのは実感している。実際、災害が発生した際にはモノに頼らない対応が重要である。 ・村民会館にある教育委員会についてであるが、役場自体は耐震補強もしているので、立て直すなどはもったいない話である。ただ、役場（施設）の機能の見直しについては現在検討事項に入っており、教育委員会の場所についても平行して検討していきたい。 【小松委員】 ・防災学習を学校でやっていくのは良いと思った。
--	---

議事経過	（４）<u>その他（電子図書について・次回検討委員会について）</u> 【メディアドゥ】 ・【資料３—１】を基に説明 【伊庭委員】 ・図書館コンテンツについて、子どもたちの作成した本を載せることは可能なのか。 【メディアドゥ】 ・デジタルデータになっていれば可能である。八王子市工学院大学附属中学校・高等学校の事例では、子どもたちが作成した本を電子図書館上に登録し、中学校３年生が英語で書いた小説をこの電子図書館上にあげるという取り組みを行っている。 【小笠原委員】 ・この電子図書と施設整備との関係性を説明してほしい。 【事務局】 ・施設整備において、図書館が入ってくると考えているが、大規模な施設整備は難しいため、北川村だからこそ、本当に必要な図書のみを図書館に置くということを考えたときに、残りのものは電子書籍でいいのではないかと考えている。そういう観点から今回ご提案いただいている。 【小笠原委員】 ・図書館をどういう整備にするのかについては、村民にも実際に来ていただき、交流の場とするにはそれなりの図書が必要になると考えている。書籍としての図書をどう捉えるのか、時代に合わせて電子図書をどう捉えるのか、それによって図書館のあり方が変わってくるのではないかと考える。 【伊庭委員】 ・学校の公民連携を考えていく際、現状の文科省の方針だけではなく、将来を見据えた観点で整備しないといけない。これから 30 年～50 年のスパンで考えていくと、これからの教育がどのようなようになっていくのか、メディアドゥの技術などをどう捉え反映していくのか、考えていくことが大切である。電子図書館と名前がついているが、これは情報を出版し発信する技術であり、これから北川学などの学習の中にそ
------	--

のような先端技術を取り込むことも検討しながら、将来を見据えた学校施設を考えていければと思う。その中の1つの手段として面白いと思ったのが、子供たちが自分たちでいつでも本を作って出版できるという可能性を秘めていること。図書館という場所は、本を読むだけではなくて本を作るところだと整理していくと面白いことができてくるだろうと思う。

- ・北川村の基本計画検討委員会について、私はすごいと思っていて、多分民間に公募してもこれ以上のアイデアが出てくる民間企業はそんなにならないと思う。だから、今後公募していろんな施設を公民連携で整備を行うにしても、通常のやり方で公共が発注して民間が提案を出してから、提案の中から選ぶというやり方ではどうもうまくいかないという認識をすごく持っている。民間の方々と公共だけでなく、住民の方々などいろんな人が集まってきてみんなで作り上げるようなプロセスが大切だと思う。今までの公民連携と違うスキームを考えなきゃいけないと思ってちょっと悩ましくなっている。今日参考になったのは、子供の創作に使える点であり、本を子供達を作る教育など面白いことができると感じた。

【柳川 AD】

- ・面積指標について、圧倒的に足りないという認識を持っており、検討する中で場所・コストなどいろんな問題も出てくると思う。そういう中で、手にとって読める書籍も平行して置くことも必要。みんな家で閉じこもって読むだけではなく、一緒にその辺で寝っ転がりながら読み、あるいは本を作るというような1つのラボのような場所にもなりうる可能性があり、それが新しい図書館のあり方となる。しかも、そこから発信して外につながっていける可能性もあり、北川村の子ども達だからこそ、図書館の使い方によって有効に働く可能性が広がるのではないかなという印象をもった。

【小笠原委員】

- ・手に取る子どもによっては変わると思う。場所について、自分たちが経験した図書館、図書室という場所ではなく、新しい図書館のあり方というのはキーワードになると思った。

【メディアドゥ】

- ・関市での取り組み事例の紹介

【柳川 AD】

- ・出版社や作家に会うイベントなどの企画は、図書館だと司書の方が企画するということになると思うが、誰が行っているのか。

【メディアドゥ】

- ・司書がいる場合、司書自らが企画運営するケースもあるが、紹介した事例では企画提案は我々の方で実施している。図書館が公民館と併設されている場合もあり、その職員の方々に企画書を作ってもらうのは大変だと思うので、我々で企画書を提供している。今日参加している片平（メディアドゥ社員）は学校司書の資格を持っており、他にも公共図書館の中で働いていたメンバーもいるので、連携は図りやすい。

【伊庭委員】

- ・メディアドゥさんはどのように収入を得ているのか。

【メディアドゥ】

- ・電子書籍の取次が本業である。サービスを契約する場合は、相手方からお支払いいただいている。

【事務局】

- ・次回検討委員会は、12月15日（水）19時～になる。